

右京一条二坊四坪・二条二坊一坪の調査

—第518次

1 はじめに

奈文研庁舎建て替えに先立つ事前調査である。当該地は平城宮佐伯門から西一坊大路をはさんで隣接し、一条南大路をまたいで、平城京右京一条二坊四坪と二条二坊一坪に相当する(図Ⅲ-71)。庁舎周辺の6ヵ所に調査区を設定して発掘調査をおこなった。調査期間は2013年7月29日から9月13日。調査面積は230㎡。

2 調査区ごとの基本層序

A 区 庁舎西北の狭隘な調査区。現地地表下1.2m付近(標高68.9m)で旧耕土・床土を検出した。その下に奈良時代の遺物を含む遺物包含層が10cm程度堆積し、その下は灰色粘質土(地山)となる。

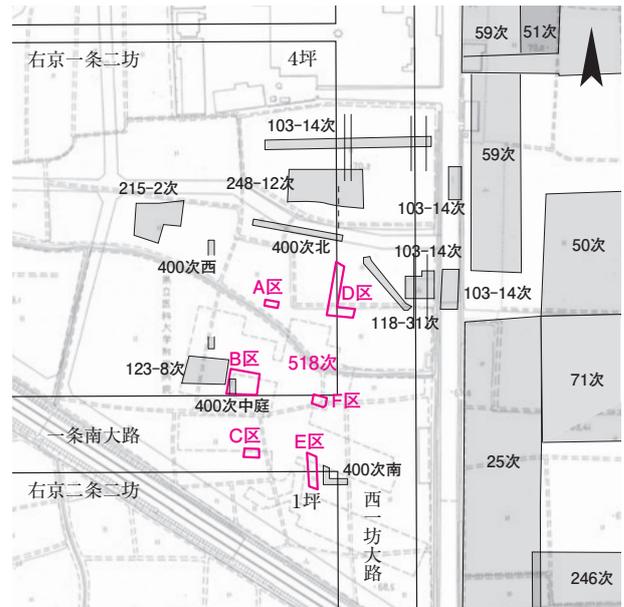
B 区 庁舎西の中庭部分にあたる。現地地表下1.0~1.5mの造成土の下に、旧耕土・床土をはさんで標高68.0mより下は黄灰色粘質土が沼状に厚く堆積する。この黄灰色粘質土は、奈良時代の土器を比較的多く含む。

C 区 庁舎の西南寄りの調査区。現地地表下1.3m(標高67.1m)まで造成土があり、その下部には旧耕土・床土がひろがる。さらに標高66.0m付近まで瓦器片を含む沼状の包含層が堆積する。さらに部分的に掘り下げたが、奈良時代の遺物包含層や遺構面は確認できず、現地地表下2.7m(標高65.7m)付近で古墳時代の土師器が出土した。

D 区 庁舎東北のL字の調査区。現地地表下1.1m(標高67.4m)付近で明黄褐色粘質土を検出し、その上面で数条の溝、穴等の遺構を検出した。

E 区 庁舎南の調査区。現地地表下1.6m(標高67.0m)付近まで造成土が厚く堆積する。その下に旧耕土が堆積し、その下に奈良時代から中世の遺物包含層(沼状堆積土)がある。明確な遺構面は検出できないが、現地表面下2.5m(標高66.0m)より下は奈良時代以前の遺物のみ含む暗黄灰色の沼状堆積土が厚く広がっている。断割調査の最深部(標高64.5m)で、植物遺体を多く含む面を検出し、沼状堆積の最下部に近いと考えられる。

F 区 庁舎東側中央付近の調査区。現地地表下1.6mで旧耕土を検出(標高66.8m)、部分的に掘り下げたところ、



図Ⅲ-71 第518次調査区位置図 1:2500

暗黄灰色粘質土の沼状堆積が厚くあることがわかった。沼状堆積の検出面は現地地表下2.2~2.6m(標高65.80~66.20m)付近。

3 検出遺構

南北溝SD2530 D区の東南部で検出した幅1.7mの素掘溝。位置からみて第248-12次(1994年)調査で検出した西一坊大路西側溝の延長であろう。

南北溝SD3200 D区を縦断する素掘溝。南北溝SD3201と重複し、これより古い。幅約4.5cm、深さ約5cm程度しか残存していない。

南北溝SD3201 D区を縦断する素掘り溝。南北溝SD3200より新しい。幅約40cm、残存深さ約10cm。

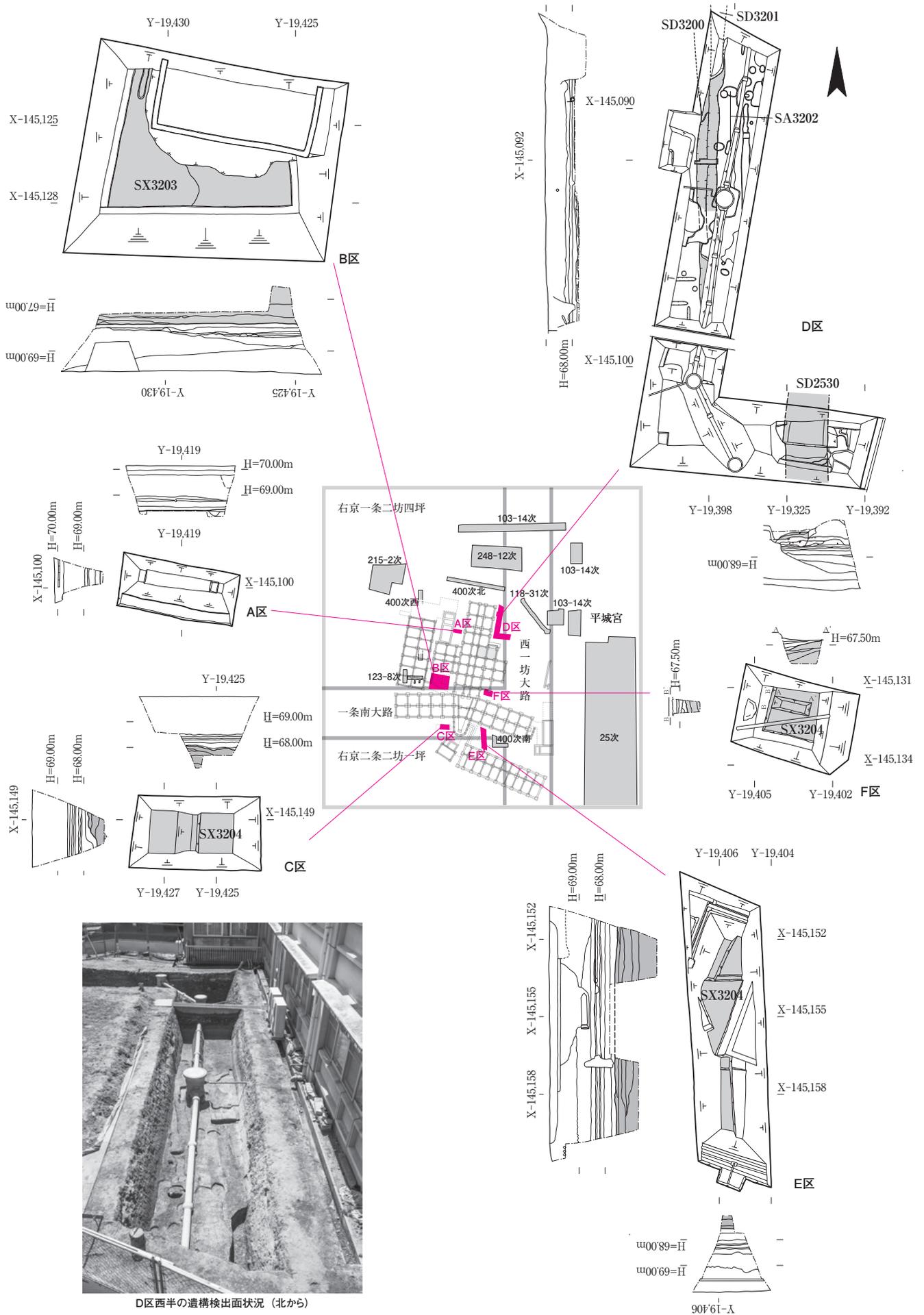
南北堀SA3202 南北溝SD3200・3201の東側で検出した掘立柱堀。規模が小さく、簡易的なものである可能性もあるが、SD3200・3201とあわせ、右京一条二坊四坪の東辺を画す施設にともなう遺構の可能性もある。

沼状遺構SX3203 B区南半分で検出した沼状堆積。奈良時代の土器を比較的多く含む。

沼状遺構SX3204 C・E・F区で検出した沼状遺構は、堆積の状況等が似るため、一連の遺構と考えられる。中世の瓦器碗などを若干含む。

4 まとめ

本調査によって、庁舎敷地南半部では中世以降の沼状遺構が広がり、奈良時代の遺構面は残っていないこと、東北部では条坊側溝など奈良時代の遺構がある程度は残ること等を確認した。2014年度におこなわれる庁舎解体後の全面的な発掘調査によって、敷地全体の遺構の状況があきらかにしていきたい。(神野 恵・箱崎和久・馬場 基)



図Ⅲ-72 第518次遺構平面図・断面図